

## 「漸進的な導き」という名の教理進化論 — 第1部 神の業の特徴

「ものみの塔」出版物で、これまでの解説に間違いが生じた理由や、度々教理が変わることの弁明の際に、頻繁に使われる言葉が「神の導きは漸進的」という言葉です。

しかし、よく考えて見ますと、じゃあ漸進的ではなく「導く」にはどうしたら良いかを考えて見るとどうなるのでしょうか。いくら考えてもそれは不可能にしか思えません。それはつまり「導き」という言葉にはすでにそうした概念は含まれているということではないのでしょうか。

例えば「成長」「時間の経過」なども「漸進的」でしかあり得ないのと同じでしょう。

ですから「導き」という表現を使うとき「漸進的」なのは言うまでもなく当たり前のことです。僅か2, 3ページの文章を読むのでさえ、瞬時では無理です。上から順に目を通してゆかなければなりません。まして「壮大な計画」があり、それを時間をかけて実現してゆくプロセスは、言うまでもなく漸進的です。

天地の創造にしても、地球に関する創造の業にしても、「第一日目、第二日目・・・」と順を追って造られました。そうした意味で確かに、神は漸進的に物事を扱われます。

あえてこの「漸進的」という言葉を強調しているのは、ともかく「「徐々に、少しずつ」しか無理なのだから、間違いがあっても、何度も変更するのもやむを得ないことだと思込ませたいのだろうと思います。

しかし「神は「中途半端」な神ではありません。同一の事柄について、やり直しや、一度決められたことを変更された例は一つもありません。もし一つでもあれば全部に対する信用性が崩壊するからです。

人間が「罪を犯した」時点で、それを解決するために、神が採られた方法は、「女の胤」に関する計画を、最初の時点で立てられ、アブラハムからのその系図の国民、イエスの誕生、贖い、再臨・・・千年王国など、遥かに長い年月を要する壮大な計画を、順を追って実行するという方法でした。最初の間をもう一度「造り直す方が」遥かに簡単だったでしょう。

しかしそれは、創造者なる神の特質、神性に反することだった違いありません。

「神は偽ることができない」という表現を借りれば、「神はやり直すことができない」と表現することもできると思います。

「あなた方に真実に言いますが、律法から最も小さな文字一つまたは文字の一点が消え去って、[記された]すべてのことが起きないよりは、むしろ天地の消え去るほうが先なのです。」—マタイ 5:18

「神の言葉、神の目的の遂行」とはこういうものです。そして同じ「神の言葉」によって宇宙は、そして、地球も動植物も人間も創造されました。言葉を出して造られた後、「いやそうじゃなくて」「あれは、やっぱり止めて、こういう風に」と言ったら宇宙は崩壊するでしょう。神の霊の導きよる言葉というのも同様です。

同一の事柄に追加、変更がないというのは、神の創造全てに見られる特徴です。

例えばこんな記述をどう思われますか。

『神が、最初アダムを造られた時に、その手に指はまだなかった。しばらく見ていると物をつかむのに便利だからと言われ、指を3本与えられた。その数年後もう少し多い方が良いとご覧になった。そこで神はアダムに12本の指を与えられたが、そのすぐ後で10本に調整された。』・

・ ・ こんな進化論的な手法は採られません。

「生命一どのように存在する世になったか」の55頁にこのような表があります。

<p>伝統的進化論が、化石の記録に示されていると期待した事柄：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 非常に簡単な携帯の生物が徐々に出現している</li> <li>・ 四肢,骨,気管など,体の種々の特色が始まりつつある</li> </ul>	<p>創造を信じる考え方が、化石の記録に示されていると期待した事柄：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 複雑な形態の生物が突然に出現している</li> <li>・ 体の種々の特色で中途半端なものはない。 どの部分もよく整っている</li> </ul>
--	---

「進化論にしたがえば、これら（動植物）は、それ以前の過渡的な先祖から進化してきたはずで  
す。ところが、そのような過渡的形態のものは一つも見いだされていません。それを暗示するもの  
のさえありません。」ー「創」5章 64ページ 28節

ここで神の創造物を引き合いに出しているのは、エホバにとって、「中途半端なもの」「過渡的な  
形態のもの」は全く不必要なものだということです。

たとえば、魚のウロコから鳥の羽毛の過渡的なものは存在しませんが、もし「漸進的」に進化した  
その途中のものを持った生き物は、どんな動物で、どこで生活して、その「ウロ羽」は何の役に  
立つのでしょうか。

このように神の創造の業は、最初から、調和のとれた、無駄のない、完成された機能を持つもの  
であるということです。

聖書の一連の記述も、何度も書き直されて完成したものではなく、漸進的でもなく、初めから  
「どの部分も良く整っている」ものが「突然に出現」する形で現されています。

信仰のための知識についても同じです。

聖なる者たちに一度かぎり伝えられた信仰のために厳しい戦いをするよう… (ユダ 3)

では、奴隷級の聖書理解による「過渡的な形態のもの」はどんな必要にかなっていたために、エ  
ホバはその「中途半端なもの」をご自分の民が信じるように導かれたと言うのでしょうか。

そしてこれはすべて過去形で語れるわけではありません。今後も「新しい理解」によって変更さ  
れうる、今現在の過渡的な理解、中途半端な教理を含んでいるのです。

奴隷級がこれまでに「捨て去って山積みになっている地層には何層にも渡って、過渡的な形態の  
教理化石が埋もれています。

神の業との何という対比でしょう。あるいは、何という皮肉でしょう。

さて、聖書中には、「秘儀」とか「神聖な奥義」とか「隠された宝」などの表現があり、イエス  
は多くの「たとえ」を用いて語り、弟子たちにだけ、その意味を説明されました。

それは、ある特定の事柄については、理解するに値する人をふるい分けるための、神の知恵によ  
ると表現されています。

しかし今日、聖書を読めば、イエスが弟子たちだけに、内緒で教えられた事柄もすべて知ることが出来ます。しかし、中には、とりわけ預言に関しては、神の特別な目的があつて、預言者たちに幻をお見せになり、その意味を説き明かしたにも関わらず、それを「終わりの時まで秘しておくように」言われているものが幾らかあります。

しかしこれらの例外的部分を除けば、神のご意志と目的は、すでに聖書の中に明らかにされています。

それは、すべての人々が読んで真理の正確な知識を得て救われるためです。

では、その正確な理解を、今さら「漸進的に」小出しにして、出し惜しみしなければならないどんな深いわけがあるのでしょうか。

すでに1900年も前からオープンになっているものを、徐々にしか理解できないようにし、しかも見間違いや、全くの見当違いを数多く経験してゆくべきなのはなぜなのでしょう。

それらのどの点に関しても、神の特質、目的、ご意志に調和しているものはありません。

もちろん、神のご意志、目的は、その項目内容はかなりの分量がありますから、1日の内に全部というわけにはいかないでしょう。

「神がご自分の聖霊を与えて、漸進的にことを導かれる」ということが現実になされるとすれば、「終わりの日に」明らかになる秘儀も含めて、順序よく、一つずつ、しかし確実になされるはずです。

神が与えられるのは真理のみですから、それが漸進的に明らかにされるということは、「明らかにされた真理」と、「まだ明らかにされていない真理」があるということです。

そこになされるのは、ひたすらの累積であった、入れ替えではないはず。

「新しい真理」と、「古い真理」などという表現を平気で使うのは、あるまじきことです。

少なくともスタンスとしては、検証して確立されるまでは「十分には分からない」として保留にするか、今のところこう考えられる。この可能性が高いように思われるというように示し、読者各自の研究や検証を仰ぐというぐらゐの見識は持ち合わせているべきではないでしょうか。

どれほど漸進的に導く必要があつたとしても、常に毎回絶対的真理と受け入れるように期待されている「過渡的な」「中途半端なもの」はまったく役立たないばかりか、大いに害になるものでしかありません。

当然ですがそれは導きではなく、混乱させ、信仰を妨害し、誤導となるからです。

「この民を導いている者たちは[彼らを]さまよわせる者、導かれている者たちは混乱させられている者なのである。」—イザヤ 9:16

さて、統治体は物事を決定する際に、祈り、そして、聖霊の導きを得ていると述べています。

靈感を受けた神の言葉に明示されている指示を祈りのうちに適用し、その指示を用いて、だれが奉仕の立場に就く資格を持つのかを決定するのは、奴隷級の義務となります。—「告げる人々」219P

「統治体は、エホバの証人の世界的な活動を指導し、漸進的な啓発を与える霊的食物を発行し、司法上の決定をするなどの面でよく協力して働いています。毎週水曜日に行なわれる会合は祈りで始められ、エホバの霊の導きを仰ぎます。扱われる事柄や下される

決定の一つ一つが、神の言葉である聖書と調和していることを確かめるために真の努力が払われます。」－「塔」1988年3月1日号、17P

統治体の真摯な態度が強調されていますが、すべての事柄を聖書に照らして考え、聖霊の導きを祈り求めるのはクリスチャンとして当たり前のことです。

しかし、言うまでもないことですが、霊を祈り求めることと、聖霊を実際に受けることとは別問題です。

では、「解釈が変更される」ことと実際に「聖霊の導き」を得たこととはどんな関連があるのでしょうか。

ある、聖書の記述、教義が、変更されるタイミング、もしくは理由は、何でしょうか。ものみの塔に言わせればおそらく、聖霊にそのように導かれたからという答え以外に無いでしょう。

では以前の聖書解釈も、（ある場合はその前の前の時も、さらにはその前の前の時にも）「祈りで始められ、エホバの霊の導きを仰」いで決定されたはずで。

それが変更されたということは、すなわち祈りを通し聖霊の導きを受けても真理か否かを正確に判断することができないことが証明された。ということの意味するのではないのでしょうか。

その時その決定に聖霊が働いていましたか。神の霊が働いていたとすると、聖霊には「当たるも八卦当たらぬも八卦」程度の効力しかないということになります。

それが変更されたということは、その以前の決定の時、聖霊は、敢えて誤導したのでしょうか。

あえて誤導したと言える聖書的根拠は見いだせないので、答えは一つしかありません。

統治体が古い解釈を決定した際、聖霊の導きなどなかった、すなわち、それは人間の考えにすぎなかったという答え以外のどんな答えが理性的に出せるのでしょうか。

#### 教義の変更は何を物語るか

「エホバの証人の教えの中に、何年かの間に変更が加えられたものがあるのはなぜですか」これは「論じる」101頁に取り上げられている問です。「聖書の示すところによると、エホバは「その僕たちに、ご自分の目的を漸進的に理解させることがおできになります。ですから、神の靈感によって聖書の一部を書いた預言者たちは、自分が書き記した事柄の意味を全部理解していたわけではありません。イエス・キリストの使徒たちも、当時、自分たちに分からない事柄が沢山あることに気づいていました。聖書は、「終わりの時」の間に真理の知識が増大することを示しています。（ダニエル 12:4）知識が増し加わると、しばしば自分の考え方を調整しなければなりません。」－「論」101ページ

このQ&Aは実に不思議な文章です。

まず、質問の内容とその回答の着眼点を敢えてずらしている事にお気づきになるのでしょうか。

質問は「変更」の理由です。

回答は、預言者は自分の書いたことの全部を理解しなかった。使徒も同様、自分たちには分からないことがあった。

これが、「変更の理由」とどこがどう結びつくのでしょうか。まったく関係のない話しです。

預言者も使徒たちも、自分の話したこと書いたもの（それは自分で考えたことではなく、神やキ

リストから「与えられた」ものであるゆえに、自分でも分からないことがあったことは確かでしょう。しかし、彼らは、何一つ「変更」していません。まして同じことを、コロコロと二転三転させたりはしていません。

この質疑は一種の「ダマシのテクニック」として使われている手法です。

「(神は)ご自分の目的を漸進的に理解させることができになります」

この表現の仕方を皆さんはどう思われるでしょうか。

神には「漸進的に理解させる」ことが「できない」分けはありませんから、肯定の反応になるのは当たり前です。しかし、そうすることが可能かどうかと、実際にそうしたというのとは全く違います。しかし、この文章は「できる」ということを「そうした」という言葉の代わりに使うことによって、肯定せざるを得ない、というより、肯定的な反応以外出ないような、真理操作をした上で、「ですから、…全部理解していたわけではありません。」と述べることによって、「それじゃ、無理もない」という結論を引き出さようとする、非常に「アスナイ」書き方です。これと似ているのは、この近づき方です。

「あなた方は園のすべての木からは食べてはならない、と神が言われたのは本当ですか」。(創世記 3:1)

こちらは逆に、疑念を抱かせる否定的な反応を引き起こさせる真理操作をした上で、誘惑する本題に入って、まんまと成功します。

最後に、「変更」の理由として挙げているのが、「真理の知識が増大する」と「考え方を調整しなければならなくな」とされています。

この文章もいかにも巧妙な書き方です。知識が増えると、考え「方」を調整することはあり得るかもしれません。しかし、ここで述べられているのは、種々雑多な矛盾する知識ではなく、「真理の知識ですから、それが増えれば増えるほど、ものごとはより鮮明に、明瞭に、強固になってゆくもので、「内容の変更」つまり知識の入れ替えなどは生じません。どれほど、真理の知識が増大しても、真理と真理が矛盾してどちらかを選択して、片方を捨てることなどないからです。

ともかく、これだけことごとく、教理の変更をせざるを得なかった、そしてこれからも変更せざるを得ないのは導きが「漸進的」だからです。

ものみの塔協会が教義を変更するとき、或いは、それを尋ねられた時に「言い訳」として決まって使われるのがこの言葉です。

「光は漸進的に輝き出るため、また人間の不完全さと弱点に起因する誤りがあったため、これらのクリスチャンは様々な見解や教えの再評価を迫られたことがありました。」塔82 3/1 7 ページ

これまでの、自分たちの度重なる間違いは結局、導きが「漸進的」だから、ということです。

上の引用文には、恨みがましい響きがふんぷんと漂います。

自分たちの、聖書研究の乏しさ、発想の貧弱さ、稚拙さ、性急さ、無責任さを棚に上げて、間違いの理由はすべて神が「漸進的」にしか光を与えてくれないからだ、と、出版物の至るところで吐露しています。

これまでの数多くの「間違い」に対して、ごくまれに、間違いを認めるコメントが出ることがありますが、その間違いをしたのは、「証人たち」であつたり「エホバの民」であつたり、「それらのクリスチャン」であつたりと、色んな表現が使われますが、「奴隷級」や「統治体」や「組織」や「協会」が間違っただけの一度もありません。

つまり、出版物の多くの解釈、説明が誤っているのに、出版している張本人は、一度も謝ったことがありません。

彼らが神の聖霊に導かれているという主張は真実なのでしょうか。

「聖霊に導かれる」とは

さて、聖書はおよそ1900年前に書き終えられました。

それ以降、追加されていません。書き終えられたということは、新しい神のご意志、目的は、当面はもうないということです。

「言い尽くされた」ということです。またその間一度も改訂版が出されていません。市販されている翻訳聖書の事ではなく、聖書本文のことです。

(ここで述べていることは、一般クリスチャンにとっての基本的な聖書に対する認識のことであり、「写本上の問題」である、後代の書き込みと判定されたものの取捨に関する、専門神学的な事柄や詳細なことなどは別問題としています)

聖書は、神のことば、神からの音信として、(神自らがそれを変更するべき)何らかの手直し、変更が必要な箇所などみじんもないものとして備えられました。

しかも必ずと言って良い程、間違いを犯す不完全な人間によって書かれたものであるにもかかわらずです。どうしてそのようなことが可能だったのでしょうか。

答えは明白です。聖霊に導かれたからに他なりません。

「聖霊に導かれる」とはそういうことです。聖霊に導かれなくともできることしかできないのであれば、それは聖霊に導かれていると言える根拠はなく、そうした主張は大抵偽りです。

聖霊は目に見えませんので、はっきりと確認することはできません。

「聖霊の導き」があったか、それともなかったか、ただの偶然なのかという判断に迷うことは多々あると思いますが、「その働き」によって、生じた結果を見ることによって、それが明らかに人知を超えていると誰もがみなすものが、ない限り、そのようには言えません。

「あなた方はその実によってそれらの人々を見分けるのです… (マタイ 7:20)

人がある程度を持ち、努力しさえすれば、必ず分かる事なら分かるが、それ以外の事は分からない。普通の人犯すかも知れない間違いを同じように犯すことで知られている人、他の人と異なることはこれと見いだせないという人の業を「普通の唯の人間の仕業」と言います。これがキーワードです。すなわち「人知を超えている」と言える何らかの証拠、そしてそれは、普通の大多数の人に認められるものがないなら、「聖霊の導き」を得ているという当人の主張を受け入れられるのでしょうか。

聖書筆者は聖霊の導きを受けつつ音信を記しました。見たこと、聞いたことなど自分の体験に基づく記述が主ですが、特に預言などは、「言を預かる」ものですから当然、当人の発想や考えではありません。完全に白紙の状態に対して神からあるいは、み使いを通して与えられたメッセージです。

人に何らかのイメージやメッセージを与える際に、1から与えるのと、すでにその人がよく知っている音信を正しく理解できるように導くのとではどちらが易いのでしょうか。

聖書の著者からの霊の導きがほんのわずかでもあれば、一度たりとも改訂版などを出す必要のない理解が得られるはず。そうであればこそ、そこに人知を超えた導きを認めうるから。そうでないなら普通の一般の人とどこが異なるのでしょうか。聖霊の導きと言えるはそういうも

のではないのでしょうか。

聖霊の導きと聖書理解、あるいは教義の変更と関連性について、別の角度から考察してみたいと思います。

「時折あるいは度々聖書の解釈が変更されるのはどうしてですか。—

次のような例えで説明できるかもしれません。ある人が暗い部屋の中に長時間いた場合、その人に徐々に光を当てるのが最善ではないでしょうか。エホバはそれと似た方法でご自分の民に真理の光を当ててこられました。彼らを漸進的に啓発されたのです。」—「ふれ告げる」708P

「その人に徐々に光を当てるのが最善」？

警察の取調室で、容疑者に自白を迫るワケでもないでしょうに、「その人」に光を当ててどうしようと言うのでしょうか。「最善」というより最悪でしょう。暗いところに長くいた人に向けて、徐々に光を当てるという発想は「イミワカンナイ」

さて、冗談はさておき、確かに神は物事を漸進的に導かれることは、ある意味確かです。

「導く」と言えば誰がどんな方法でも「漸進的」になります。

英語ではリードですが、分かりやすく言えば「連れて行く」というような意味ですから、スピードの差こそあれ瞬間移動でもしない限りそういうものです。

東奔西走、右往左往のような導き方か、確実な道を最短かという違いはあります。

最悪の場合「2人とも穴に落ちる」という導きなどもあります。

「神の導き」とはどのようなものだと期待できるのでしょうか。

聖霊を祈り求めた際の神の約束はどのようなものでしょうか。

「求めつづけなさい。そうすれば与えられます。探しつづけなさい。そうすれば見いだせます。たたきつづけなさい。そうすれば開かれます。だれでも求めている者は受け、探している者は見いだし、まただれでもたたいている者には開かれるのです。実際、あなた方のうちの父親が、自分の子が魚を求める場合に、魚のかわりに蛇を渡すようなことをするのでしょうか。あるいはまた、卵を求める場合に、さそりを渡したりするのでしょうか。それで、あなた方が、邪悪な者でありながら、自分の子供に良い贈り物を与えることを知っているのであれば、まして天の父は、ご自分に求めている者に聖霊を与えてくださるのです」。—ルカ 11:9 - 13

「それで、あなた方の中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は神に求めつづけなさい。[神]はすべての人に寛大に、またとがめることなく与えてくださるのです。そのようにすれば、それは与えられます」 —ヤコブ 1:5)

この神の約束はどんな特別な人が得られる特権なんのでしょうか。

神は寛大ですから、「誰でも」「誰でも」と繰り返し強調されています。

仮に必要なものを必要な時々の一つずつであったとしても、欠陥品を後でリコールしなければならないようなものではなく、申し分のない永続的なものを与えて下さるはずではないのでしょうか。また、「咎めることなく与えてくださる」のですから、全くの見当違いや、不適切な結論しか出せない程度の導きではなく、十分にご自分の意に合った結論が導き出せる程の啓発を求めたとしても、「それは求め過ぎだ」として、それを控えられることはないはずで

そして善良な方ですから、求めた以上のものを（誰にでも）与えて下さるはずで、であるなら「理解を得ることを許された人」「食物を受け取って分配するために特別に選んで任命した人」にはどれほど豊かに与えられることでしょうか。むしろ、そうした役目を担っているのなら、こちらから願い求めることもなく、これこれのものを分配しなさいと、その奴隷にノルマが割り当てられると言うものではないでしょうか。わずかの期間しか効力のない、いつ賞味期限が切れるかわからないようなものではなく、真に栄養豊かな、自分もそして子供たちにも安心して食べさせてあげられる永続的な霊的食物を分け与える事ができない、その食物の管理が行き届かないような状態にある「全てのをゆだねられた」一団というのはどういうものなんでしょうか。

ところで、食品を扱う業者に義務づけられている「JAS法」というのがあります。

正式には「農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律」といいます。

「品質表示基準制度」という法律に基づいて「賞味期限」などを表示する義務があります。

もし「奴隷級」の霊的食物に事実に基づく「品質」ラベルを付けたらこのようなラベルを全ての出版物に貼るよう義務づけられるはずで、

しかし、こんな食物は出荷そのものが許可されることはないでしょう。

「品質表示基準制度」に基づく表示	
製造場所	神奈川県海老名市中新田1271 ものみの塔聖書冊子協会
保存方法	常温
賞味期限	不定
使用方法など	賞味期限後は破棄して下さい 当社の全ての食品は、何の前触れもなくある日突然賞味期限が切れます。 いつ切れるかは当社でも分かりません いつまでもつ という保証は致しかねます。

賞味期限切れの霊的食物に関する具体例を挙げてみましょう。

例えば、「あなた方に真実に言いますが、すべての事が起こるまで、この世代は決して過ぎ去りません。」というルカ 21:32の言葉を一例として取り上げてみますと、かつての説明は、この「世代」というのは「終わりの日のしるし」を見た人々であり、その同世代の人々が「しるしの最初から最後まで全部を見る」ことになるので、長くてもせいぜい7, 80年位、しるしを認識できる年齢は15才くらいだから、終わりの日の全期間はそれよりずっと短いはず」と言われてきました。なるほど、素直に読めば、誰がどう読んでも、およそそういう意味だと言うことは分かります。

そして「認識できる年齢が10才くらい」になり、さらに「その年に生まれた人」になり、だいたい80年ということではばらく落ち着いていました。そして1914年生まれの人が81才になった年に、ついに訪れました！！

まさにぴったり予言通りの年である1995年に「ものみの塔」に掲載されました。

**「世代」とはいつの時代にもいる「邪悪な人々」のことです。！**

1995年秋に、「まばゆい光がきらめいたため、神の油そそがれた僕たち、つまり『忠実で思慮深い奴隷』が、「世代」というテーマを再検討する」べき時が訪れたのです。

教理変更の時はいつもそうですが、結局「まばゆい光がきらめく」時というのは、「つじつまが合わなくなって、どうにもならず、もはやごまかしも効かなくなって、やむを得ないと腹をくくったと時」という言葉の代わりに使われているようです。今後協会の出版物でそのような表現を見つけたら、このように入れ替えて読むと全体が分かり易くなると思います。



それで、いつも通り、聖霊に導かれて研究することによって、つまり、自分たちで気付いたり、分析したり、聖句の調和を図ったりすることによって、エホバから言葉を受けたので、塔95 11/1号の研究記事には多くの聖句を挙げて論じられ、完璧な聖書的根拠をもって解説されました。それまでの理解もエホバから受けた言葉でしたから間違いなく真理のはずです。そして今回もやはりエホバから受けた言葉ですから、やっぱり真理です。

そしてさらにその12年後、またもや「光がきらめいた」のです。そのため、「**神の油そそがれた僕たち、つまり『忠実で思慮深い奴隷』が、「世代」というテーマを再再検討する**」べき時が訪れました。聖霊に導かれて研究することによって、つまり、自分たちで気付いたり、分析したり、聖句の調和を図ったりすることによって、エホバから言葉を受けたのです。

**「世代」とは「油注がれた残りの者」のことです。！**

それまでの理解もエホバから受けた言葉でしたから、いっそう確かな真理でしたが、（内容的には「邪悪な人々」から「油注がれた者」という180度正反対のものに変更されたわけですが）今回もやはり、エホバから受けた言葉ですから、この上なく確かな真理なのです。何と豊かに光が降り注いでいるのでしょうか。

どれほど黒を白と呼ぼうが、奴隷級が決めたことですから、どれほど変更があってもそのどれも紛れもない真理なのです。エホバの証人は、その都度その結論を喜んで受け入れて、決して混乱することも当惑することもなく、それらの雑誌を携えて「理性による神聖な奉仕」を行ってゆく務めがあるのです。あなたにもできそうですか。

そしてその翌年、それは「油注がれた残りの者」の選びが終わった1935年から73年後に当たる2008年に、またもや「光がきらめいた」のです。そのため、「『忠実で思慮深い奴隷』が、「油注がれた残りの者」というテーマを再検討する」べき時が訪れました。聖霊に導かれて研究することによって、つまり、自分たちで気付いたり、分析したり、聖句の調和を図ったりすることによって、エホバから言葉を受けたのです。

**「油注がれた残りの者」の選びはまだ終わっていません。**

1935年に14才でバステスマを受けて油注がれたとしても、今やすでに90才になっています。油注がれた残りの者の代表者である「統治体」のメンバーには50才代の兄弟も何人かいます。今回のこの変更で、「終わりの日」という期間に起きるとされる「**すべての事が起こるまで、この世代（油注がれた残りの者）は決して過ぎ去りません。**」つまり、油注がれたと自称する人が存続する限り、それは決して過ぎ去らないので、「終わりの日」が100年だろうが200年続こうが、もう誰にも文句を言わせないようにすることができました。つまり統治体の老齢化に伴うメンバーの交代も気にせず、未来永劫に安泰と相成ったわけであります。めでたし、めでたし。

さて、一例を挙げるのが長くなりすぎたので話を元に戻します。

前述した「ふれ告げる」708Pから引用した たとえですが、

「**暗い部屋の中に長時間いた場合、その人に徐々に光を当てる・・・ように漸進的に啓発された**」という記述ですが、「徐々に」とは一体どれくらいの時間をかけて全開というか完全に光が当たるようにされたと考えられるのでしょうか。そして今日その何%位の光が当たっていると言える

のでしょうか。

起きている事実から推察しますと、一例として先ほど取り上げた「世代」の理解についてですが、この理解の重要性はどれくらいでしょうか。

物事の重要性には、まあ知らないよりは知っていた方がいい。というものから、これをちゃんと見極めずして何を知り得たというのか。という重要性の違いというものがあります。

「最初から最後までも見届けるこの世代」について述べる少し前にイエスはこう言われています。「これらの事が起こり始めたら、あなた方は身をまっすぐに起こし、頭を上げなさい。あなた方の救出が近づいているからです」(ルカ 21:28)

最初のしるしを見たとき、自分の「救出が近づいた」ことを確信できる。という約束です。「世代」は救出される世代だということです。

そもそも「終わりの日のしるし」が与えられた目的は何ですか。「救い」を得させるためです。そもそもキリストが地上に来られて贖いとして死なれたのは何のためですか。キリストを生み出す民族を選び律法を与えられたのは何のためですか。一つの選ばれた国民を持つためにアブラハムと契約を結ばれたのは何のためですか。そもそも聖書が書かれ、それを読み理解する必要があるのは何のためですか。「救い」のためです。

「世代」は聖書歴史の年月、人類史の年月という膨大な年月をかけて、神が周到な準備をして取り組まれた「救い」のためのすべてのプログラムが成就する時、その成就に実際に預かる人々に関するものです。これを見極めずして何を知り得たと言うのかという類の、クリスチャンにとって極めて重要な意味を持つ理解なのです。その「世代」の理解が、最初の光が当たり始めたときからすでに100年以上経過している今日でさえ「邪悪な人々だ」いや「油注がれた者だ」と二転三転している状況を見ると、かすかな光が当たっているとすら言えない、未だ暗闇に近い状態だということが分かります。100年以上かかってこれくらいですから、全容が見えて来るまで少なくとも後、数百年以上は必要かも知れません。